

広重展

— 天才浮世絵師が描く日本名所紀行 —



「東海道五拾三次之内 箱根 湖水図」(図版 N011)

歌川広重は、葛飾北斎とともに風景版画家として、幕末の浮世絵を支えました。その代表作は、保永堂版「東海道五拾三次之内」です。

当時、江戸の庶民の間では、旅行ブームが沸き起こり、東海道の旅が注目されるようになったことから、広重は30代半ばにして一躍人気絵師になりました。

広重が描く風景版画は、宿場や名所の景色にフィクションを加えながら、旅の風情や四季の情感を作品の中に描き出しています。

それは、駿河湾に面した温暖な宿場町「蒲原」を雪に覆われた宿場町として仕上げたり、「庄野」では、どこにでもありそうな山中の坂道で、にわか雨に襲われた人々を描くといったものです。

ここでは、この広重の製作技術の中から、「天候」と「構図」にポイントをおいて、広重が描く浮世絵版画の魅力を紹介します。



【展示室1】

～夕立の中を行く旅人を描く～



「東海道五拾三次之内 庄野 白雨（しょうの はくう）」（図版 No46）

ポイント1「天候・夕立」

広重は、「雨の画家」といわれることもあるくらいに雨の扱いに長けており、さまざまな状況の雨の様子を見事に描き分けています。

よく知られた作品の一つで、「白雨」とは、にわか雨のことです。突然の激しい夕立に出くわし、農作業の人々は家へと駆け出し、駕籠かきも先を急いでいます。庄野の町の家並みの向こうに幾重にも見える竹藪はシルエットで表現され、雨脚の激しさを表しています。

ポイント2「構図・不安定な三角形」

人々が駆ける坂と雨脚の線、それにシルエット状に描かれた竹藪の線とが、不安定な三角形を作り出しています。その形の不安定さは、夕立の突然さとその強さ、通行人の不安と慌てぶりを暗示するのにきわめて効果的なものとなっています。

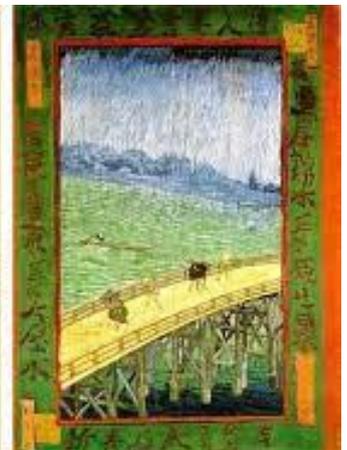
ゴッホが模写した夕立の構図

浮世絵の魅力に深く心をひかれ夢中になったゴッホは、浮世絵の素晴らしいところを自身の作品にどんどん取り入れ、広重の作品「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」や「名所江戸百景 亀戸梅屋敷」を模写しています。

(Wikipedia より画像引用)



広重「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」



ゴッホ「日本趣味：雨の大はしあたけの夕立」

～静まり返る雪の山道を歩く旅人を描く～



「東海道五拾三次之内 蒲原 夜之雪(かんばら よるのゆき)(図版No16)

ポイント3「天候・雪」

最も高名な作品のひとつで、広重の画業を代表する作品です。静まり返る雪の山道を旅人が俯（うつむ）きがちに歩いていく様は、冬の厳しさと寂寥感（せきりょうかん）を感じさせ、情緒が溢れています。

雪空のぼかしが深い闇をいっそう引き立てています。

【特別展示室】

広重は、「六十余州名所図会 丹波 鐘坂」の中で、鐘ヶ坂や鬼の架け橋を描いています。実際の写真とは大きく違い、鬼の架け橋も強調して表現されていますね。

また、鬼の架け橋は、柏原町出身の洋画家 川端謹次も描いていますので、それぞれの違いを比べて見ましょう！



「六十余州名所図会 丹波 鐘坂」



川端謹次「鬼架橋」1987年



「鬼の架け橋」(2020.10撮影)

浮世絵の豆知識

●浮世絵とは

浮世絵は、江戸時代に成立した絵画様式のひとつです。江戸時代の幕開けと共にその歴史は始まり、生活や流行、遊女や役者などをテーマにした絵画で、庶民層を中心に盛り上がりを見せました。

浮世絵は、肉筆画に始まり、「錦絵(にしきえ)」と呼ばれる(木板を用いた鮮やかな多色摺りの版画)によって、大きく発展しました。当初はモノクロの「墨摺(すみずり)絵」でしたが、丹色(にいろ・濃いオレンジ色)の着色や植物性の染料を用いたものへと発展し、極彩色で摺った「錦絵」が誕生しました。

●浮世絵と江戸時代の始まり

戦国時代を経て、天下統一を果たした徳川家康によって、江戸に幕府が開かれました。平和な世が訪れるとともに、庶民の暮らし向きもよくなり、江戸では町人が活躍し、町人文化が発展していきました。そして、江戸時代は日本の歴史上初めて、町人が文化の担い手となるのです。

江戸時代初期から始まった浮世絵は、その後も多くの絵師を生み出しました。その代表的な浮世絵師としては、広重のほかに、「役者絵」で有名な東洲斎写楽(とうしゅうさいしゃらく)や「富嶽三十六景(ふがくさんじゅうろっけい)」で有名な葛飾北斎(かつしかほくさい)などがいます。

●分業体制で作られた浮世絵

木版画の浮世絵は、「版元(はんもと)」、「絵師(えし)」、「彫師(ほりし)」、「摺師(すりし)」による分業体制で行なわれました。

「版元」 企画から宣伝、販売までの全工程の監修を行ないます。

「絵師」 木版のための下絵を描きます。広重は、ここを担当していました。

「彫師」 下絵を裏返して版木に貼り付けて、その上から彫り、版を作ります。版は、絵の色の数だけ作成します。また、彫師には、顔や髪が生え際を彫る者、胴体や着物など頭以外の部分を彫る者、文字を彫る者がいました。

「摺師」 刷毛等で着色した板木に和紙を置き、その上から馬簾(ばれん)という道具でこすって摺りあげます。この作業を色版ごとに繰り返して色を重ねていきます。また、摺師は「ぼかし」「空摺(からずり)」といった浮世絵独特の技法も駆使して多彩な錦絵の世界を摺りあげていました。

「ぼかし」や「空摺り」を探してみよう！

ぼかし 版面を濡らしその上に刷毛で絵の具をのせてぼかす技法です。画面の最上部にある帯状のグラデーションが特に有名で「一文字ぼかし」と呼ばれています。

【ヒント】 展示室1「図版No.29」の川辺の大気、展示室3「図版No.73」の屋根、
展示室4「図版No.138」の海に注目！（他にもたくさんあります！）

空摺 版木に絵の具を塗らないで、摺りの圧力だけで紙面に凹凸模様を作り出す技法です。着物の柄や雪や鳥の羽などの表現に用いられています。

【ヒント】 展示室1「図版No.28」の煙、展示室2「図版No.98」の着物の襟に注目！